



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3978 号 2017.10.26 発行

社説 障害者施設での虐待 行政の調査力が足りない 毎日新聞 2017年10月26日

宇都宮市の知的障害者施設で入所者の男性が腰の骨を折るなどの重傷を負った事件があり、職員計5人が逮捕された。

障害者虐待防止法が施行されて5年。各市町村には虐待防止センターが設置され、厚生労働省は各施設に虐待防止委員会を設置して早期発見と通報に努めるよう指導してきた。

しかし通報義務を果たさず、行政の調査に対し事実を否認して証拠の隠蔽（いんぺい）を図る施設は相変わらず多い。虐待が疑われる施設に毅然（きぜん）と対処するため、自治体の虐待防止センターの調査体制を強化する必要がある。

宇都宮の事件では、体調不良を訴えた男性が病院に運ばれて一時意識不明の重体になり、東京都内に住む家族から警察に相談があつて、初めて虐待が発覚した。

複数の職員が男性に代わる代わる暴行を加えた疑いがあり、内部調査では職員の目撃証言も得られたという。ところが、証言記録が廃棄されており、栃木県警OBの職員2人が証拠隠滅の疑いで逮捕された。施設内の防犯カメラの映像も消去された疑いもたれている。

厚労省は毎年、全都道府県や市町村職員に対する虐待防止研修を実施している。最近警察との連携の強化を重視している。警察の証拠保全や事情聴取のスキルを虐待調査に取り入れることが必要なためだ。

宇都宮の施設では職員として採用した県警OBに虐待防止の取り組みや事故対応を任せていた。今回の暴行事件でも内部調査を担当していた。厚労省の方針に沿う形で警察の専門性を取り入れていたわけだが、その県警OBが虐待の証拠隠滅を行っていたとすれば言語道断だ。

もともと施設内の虐待は、通報があつても虐待と認知される割合が著しく低い。行政の調査能力の低さ、施設とのなれあい体質が背景にある。施設側が通報した職員に損害賠償を求めたり、自治体の調査にクレームを付けたりして抵抗する例も増えている。

虐待防止センターの職員増や専門的な調査能力の向上は不可欠だ。

被害者や職員が勇気を出して通報しても、それが生かされなければ無力感が広がるだけだ。障害者を支援する施設での虐待を一掃するよう、国も自治体も全力を尽くすべきだ。

来年度予算 診療報酬引き下げなどを提案

NHK ニュース 2017年10月25日

財務省は来年度の予算編成に向けて、高齢化で膨らみ続ける医療や介護などの社会保障費を抑える見直し案を明らかにしました。医師の収入などになる「診療報酬」について、一般の賃金や物価の伸びを上回る上昇が続いてきたとして引き下げを提案し、今後、厚生労働省などと調整を進めることになりました。

見直し案は、25日開かれた財務大臣の諮問機関、財政制度等審議会でも財務省が示しました。来年度の予算編成では歳出の3分の1、32兆円余りを占める医療や介護などの社会保障の伸びを抑えることが引き続き最大の課題になっています。

このため、医療分野では病院などに支払われる「診療報酬」を来年度、2%台半ば、金額に換算して1兆円以上引き下げよう提案しました。民間企業の賃金や物価の水準がほぼ横ばいで伸び悩む中、医師の収入などになる報酬は上昇が続いてきたと指摘し、引き下げが必要だと指摘しています。

また、再来年度以降に行う見直し案として、75歳以上の高齢者の追加の負担を打ち出しました。病院にかかった際窓口で支払う自己負担を、今の原則1割から段階的に2割に引き上げるべきだとしています。

介護の分野でも、介護サービスを提供する事業者を支払われる「介護報酬」について、引き下げを提案しました。

さらに、子育て支援の分野では、中学生までの子どもがいる世帯に支給される「児童手当」について、所得が高い世帯への支給を廃止するよう提案しました。

また2020年度末までに32万人分の保育の受け皿を新たに整備するため、企業が負担している拠出金の引き上げも提案しました。

財務省は、これから年末にかけて厚生労働省などとの調整を進めますが、報酬の引き下げは日本医師会などからの反発が予想され、来年度の予算編成の大きな焦点になる見通しです。

日野町「JK課」立ち上げ 女子高生の力で地域再生

山陰中央新報 2017年10月25日

鳥取県日野町が地域づくりに情熱を燃やす高校生ボランティアの活動拠点に役場庁舎を開放し、新たに「JK（地元改革）課」を立ち上げる。「課長」を含む構成員は地元の日野高校や米子南高校に通う16人の生徒たち。1人を除く全員が女子で、11月1日の辞令交付を受け、地域再生に向けたイベントの自主企画や町のPR、政策提言など幅広い「業務」をこなす。町条例で定める正規の行政組織ではないが、関係者は「少子高齢化にあえぐ地域に若者の風を吹き込みたい」と期待を寄せる。

患者会 がん経験者に里親ガイド 「生き方の選択肢に」



毎日新聞 2017年10月25日
がん経験者向けの里親・特別養子縁組の冊子。がん患者会「オレンジティ」が作製した＝細川貴代撮影

子宮がんや卵巣がんなど女性特有のがんの患者会「オレンジティ」（静岡県熱海市）が、がん経験者や家族ら向けに、里親や特別養子縁組を紹介する冊子を作った。実子が持てなくても、子育てによって社会的支援ができることを伝えたいとしている。

冊子は、子宮頸（けい）がんの手術で子どもを産めなくなった妻

と夫が話し合いを重ね、里子として女の子を受け入れ、やがて特別養子縁組をするというストーリーで、里親・特別養子縁組の制度や手続きの基本を分かりやすく説明している。里親は家庭で一時的に預かる制度で、特別養子縁組が認められると法律上の親子となる。

がん治療の際には妊娠や出産に必要な臓器を摘出したり、機能が失われたりして妊娠できなくなることも多い。子宮頸がんや乳がんなどは若い患者も多く、10代半ば～30代の世代には深刻な問題だ。治療後の妊娠・出産を可能にする卵子や卵巣、精子の凍結など

の技術はあるが、出産例は多いとは言えない。

一方、早期発見や治療の進歩でがん患者の生存率は上昇し、多くの人が普通の生活に戻っている。2006～08年にがんと診断された人全体の5年後の生存率は62.1%。乳がんでは91.1%、子宮頸がんは73.4%だ。

同会理事長の河村裕美さん（50）は、特別養子縁組で長女（2）を迎えた。河村さんは1999年に子宮頸がんを診断された。結婚のわずか1週間後、すぐに子宮を摘出する手術を受けた。

治療が落ち着いたころ、児童相談所に里親の申請をした。15年夏、ようやく0歳の女児を託された。暮らし始めて1年後に裁判所から特別養子縁組が認められた。

河村さんは「とても良い経験をさせてもらっている」と話す。「里親や特別養子縁組は子どもの福祉のための制度。そこを十分理解した上で、がん経験者にも生き方の選択肢の一つとしてこの制度を知ってほしい」と話す。

会は、がん経験者を対象に里親や特別養子縁組の相談も受け付けている。冊子の問い合わせは同会事務局（電話090・7434・2002、メール ot@o-tea.org）。【細川貴代】

「かにぱん」ちぎって知育 消費者に話題 浜松のメーカー



静岡新聞 2017年10月24日
ちぎって食べながら学べる「かにぱん」の魅力を伝える「かにぱんお姉さん」の望月沙枝子さん＝6日午後、浜松市中区の三立製菓

カニ（元の状態）→トンボ→セミ

浜松市中区の菓子メーカー三立製菓のロングセラー商品「かにぱん」が食べながら学べる知育パンと



して注目を集めている。カニをかたどったパンを割れ目に沿ってちぎると、動物や昆虫などさまざまな形になったり、ちぎったパンを組み合わせて自由に形を作ったりできる点が創造力の養成に効果があると期待されているからだ。同社は親子向けのちぎり方教室を開催するなど新たな試みも始め、普及を図っている。

「源氏パイ」など県民になじみ深い商品を手掛ける同社がかにぱんを発売したのは1974年。パンの割れ目は本来、焼きむらを防ぐための工夫だったが、2000年ごろに消費者の間で割れ目に沿ってちぎり、形を作る食べ方が広まったため、同社もパッケージにちぎり方を掲載するなどPRを始めた。

提案する公式の形はチョウチョウやセミ、キリン、携帯電話など約20種。このほか、ちぎったパンのパーツ13個を組み合わせ、オリジナルの形を作る楽しみ方も紹介している。

1年前には子育てサークルや幼稚園などを対象にした「かにぱん教室」を開始。親子がさまざまな形を作って楽しみ、母親には、かにぱんのアレンジレシピも紹介している。ことし6月には特設サイトをリニューアルし、ちぎり方を紹介する「かにぱんの歌」も動画投稿サイト「ユーチューブ」で発信する。

最近ではツイッター上でかにぱんが話題になった。消費者がちぎり方が載ったパッケージを投稿したところ、「いいね」は3万件以上、「リツイート」（転載）は2万6千件以上に上り、「面白い」「その形は厳しいかも…」など多くの感想が寄せられた。

「かにぱんお姉さん」として教室の講師を務める同社企画課の望月沙枝子さんは「子供たちは予想もしない形を作る。食いつき方がすごい」と実感し、「創造力を育みながら、かにぱんを好きになってくれれば」と期待を寄せている。

手話ロボット、大阪の中学生開発 言葉を翻訳、世界大会へ

共同通信 2017年10月24日

大阪市の追手門学院大手前中学のチームが、人の言葉を手話に翻訳するロボットを開発した。9月に東京で開かれたコンテストの国内大会で最優秀賞を獲得、11月には世界大会に挑む。リーダーで3年の辰巳瑛さん(14)は「両親が聴覚に障害があり、手話が使えない人でも耳の不自由な人と交流しやすくなった」と話す。

人の言葉を手話に翻訳するロボットを開発した追手門学院大手前中学のチーム。右端はリーダーの辰巳瑛さん=20日、大阪市

ロボットは高さ約50センチ、幅約25センチ、重さ約3キロで、人の指先から腕の部分の形をしている。辰巳さんらロボットサイエンス部の1～3年生5人が、オリジナルのロボットが作れる部品が入った市販のキットに、音声受信用のタブレット端末を組み合わせて製作した。



長野 県警が「Web110番」運用へ 聴覚障害者ら対象

中日新聞 2017年10月26日

Web110番通報システムの画面=長野市で

長野県警 Web110番
Nagano Police Web110

Web110番を受け付けました。パトカー等の手配を行いますので、近くの安全な場所でお待ちください。その間にもう少し詳しい状況をおたずねします。

Web 110 Call received. A patrol car or other vehicle is being prepared for dispatch. Please move to a safe location nearby to wait. Please provide more detailed information while you wait.

■けが人はいますか?
□Is anyone hurt(?)

いる(yes)	いない(no)
---------	---------

■救急車は必要ですか?
□Do you require an ambulance(?)

いる(yes)	いらぬ(no)
---------	---------

■内容を簡単に入力してください。(110文字以内で)

長野県警察
Nagano Prefectural Police Headquarters

県警は二十五日、インターネットサイトから通報できる「Web110番通報システム」運用を十一月一日から始めると発表した。聴覚や言語機能に障害のある人向けに通報用のアドレスを設けてメールで受け付けてきたが、会話できない切迫した状況の犯罪被害者らにも活用してもらう。

県警は、メールを活用した通報を二〇〇五年に始めたが、迷惑メールが相次いだ。県聴覚障がい者情報センターによる周知に限定したところ、一二～一六年度の五年間で利用は二件にとどまっていた。二件とも事件や事故の通報ではなく、緊急性のない相談だった。

昨年四月に障害者差別解消法が施行されたことなどを受け、通報システムを一新することにした。通報メールの受け付けは来年一月ごろに取りやめる予定。

十一月一日午前九時から運用される新システムは、県警のホームページから専用サイトへ移動。事件か事故か指定した上で、交通事故や強盗、痴漢な

どを選び、住所などの項目を入力した後、無料通話アプリ「LINE(ライン)」のように文字を入力して通信指令課員とやりとりする。写真を投稿して様子を伝えることもできる。

スマートフォンなどの端末の衛星利用測位システム(GPS)機能を活用すれば、通報者の位置情報が取得でき、迅速な対応につながる。全ての文章に英語が併記され、日本語が苦手な外国人も利用できる。

通信指令課の町田勉管理幹は「言葉を話せないために通報できず、被害に遭う人がいてはいけない。有効な活用を進めたい」と話した。(中島咲樹)

長野・小諸市、アニメポスターをふるさと納税返礼品に



日本経済新聞 2017年10月25日
小諸市は27日、ふるさと納税の返礼品に同市が舞台となったアニメ「あの夏で待ってる」のポスターを追加する。1万円以上納税した人が申し込める。アニメポスターの返礼品は県内で初めてという。若者に人気のアニメを利用して、

市の認知度向上につなげる考え。

ポスターの大きさは縦56センチ、横1メートル40センチ。梱包作業は市内の障害者就業施設が担う。12月には小諸を舞台とする別のアニメのポスターを返礼品に追加する。

小諸市によると、大都市圏の60歳以上の人からの同市の認知度は8割以上であるのに対し、30歳以下の若者からの認知度は4割にとどまっているという。市は「急激な人口減少や、新幹線の停車駅にならなかったことなどで町の活力が失われつつある」と危機感を強めている。

大同生命保険がグランプリ受賞 ユニバーサルマナーアワードで19件表彰



東京新聞 2017年10月26日
一般社団法人日本ユニバーサルマナー協会（代表理事・垣内俊哉）は、高齢者や障害者など多様な人々に心地よい取り組みを推進している企業・団体を表彰する「ユニバーサルマナーアワード2017」の表彰式を新宿区の京王プラザホテルで開いた。

応募四十二件を、「革新性」「継続性」「波及性」「実効性」の観点から審査し、

全てを一定水準で満たしている十九件を選んだ。イノベーション、サステナビリティ、インパクト、インクルージョンの各部門に分けて表彰した。WEB投票によるグランプリは、大同生命保険が受賞した。

絵画や陶芸…きのかわ支援学校の児童・生徒らの力作ずらり 大石順教尼の没後50年特別企画展

産経新聞 2017年10月26日
県立きのかわ支援学校（橋本市）の児童、生徒の力作を集めた作品展（九度山町教委主催）が、同町九度山の旧萱野家（大石順教尼の記念館）で開かれている。順教尼の没後50年を記念した特別企画展として実施。順教尼の作品を含め、書や絵画、陶芸品など計約90点が展示されている。11月5日まで。

大阪生まれの順教尼はもともと「よね」という名前で、17歳の時、事件に巻き込まれ、両腕を切り落とされた。筆を口に加えて書画を制作。高野山で出家得度をするため、九度山の旧萱野家当主、正之助・タツ夫婦の支援を受けた。しばらく旧萱野家で過ごした後、身体障害者の指導に生涯をささげたという。

今回の企画展では、同校児童や生徒らが手がけた絵画や、ティッシュペーパーに絵の具で模様を付けて額におさめた「ティッシュアート」などのほか、順教尼による美人画やか

がり火を描いた掛け軸なども展示している。

また、数奇な運命をたどり、晩年には視力を失った女流歌人、柳原白蓮（びやくれん）の作品展も同時開催。町とも交流が深い所有者の講談師、旭堂南陵さんの協力で、色紙や短冊、掛け軸など12点を紹介している。

町教委は「同じ時代に人生の苦難を不屈の精神で乗り越えた生き様は作品を通じて勇気や力を与えてくれる」としている。

午前10時～午後4時半。月・火曜休。無料。問い合わせは旧萱野家（電）0736・54・2411。

網走の日体大支援学校、屋内直線走路を整備 12月に利用開始 一般にも開放へ

北海道新聞 2017年10月26日
完成のイメージ図（日体大付属高等支援学校提供）



【網走】日体大付属高等支援学校は、通年利用できる屋内直線走路「日体大網走ランニングスタジアム」を、校内に整備する。障害者スポーツの振興を図るとともに合宿誘致につながる考えで、12月の利用開始を目指す。授業などで使わない時間帯は、早ければ来年1月にも一般開放を始める予定だ。

施設は長さ150メートル、幅27メートル。室内に120メートルの直線走路を4レーン確保できる。バーベルや自転車型トレーニング器具が設置され、簡単なウエイトトレーニングもできる。

私の中の、知らない私



NHKニュース 2017年10月25日

その女性は31歳になるまで、普通に暮らしていました。頑張って勉強し弁護士の資格も取りました。ところが映画であるシーンを見た時、人生が変わりました。心の中に自分の知らなかった幼いころの自分が何人も現れてきたのです。現れてきた、たくさんの“私”。その“私”は過去のつらい記憶を引き受けてくれたのです。

（ネットワーク報道部記者 吉永な

つみ）

女性は素顔でみずからの体験を語ってくれました。同じような苦しみを持つ人のため、苦しむ人を支える人のため、そして多くの人々が抱く誤解を解くためでした。

素顔で証言

女性は素顔でみずからの体験を語ってくれました。同じような苦しみを持つ人のため、苦しむ人を支える人のため、そして多くの人々が抱く誤解を解くためでした。

アメリカから来日した女性はオルガ・トゥルヒーヨさん、体験を語ったのは虐待や暴力を受けた女性たちを支援する、NPO法人の講演会でした。

ある日突然

オルガさんに、その時は突然訪れました。映画で女性が襲われるシーンを見た時、急に息が詰まり、体には激しい痛みが走って発作が起きたのです。「自分にも同じような経験がある」という考えが頭の中を駆けめぐります。

パニックのような症状は、何か月も続き、精神科を受診しました。医師は成長の過程で心の傷となる出来事があったと考え、カウンセリングを慎重に時間をかけて行いました。

医師との信頼関係が深まったころ、オルガさんの中の「3歳の私」が父親から最初に性的な虐待をされた時のことを医師に話し始めました。その声は幼く、口調も子どものものでした。

その後も、「5歳」「7歳」「12歳」とそれぞれの年齢のオルガさんが現

れ、その年齢の様子で兄やその友人たちからも性暴力を受けたこと、親から売春を強要されていたことを医師に語ったのです。

意識から遠ざけるしかないほどつらい経験の数々を思いだし、1人の人間の記憶としてまとめていくカウンセリング。オルガさんは、あふれるように出てくる記憶にはどこか現実味がなく、自分の身に起きたことではないような感覚があったそうです。

「自分が話している内容が、ほかの人から届いている情報のように感じた」。

時には、殴られた時の体の痛みがよみがえることもあり、医師は根気よくカウンセリングを続け、オルガさんも逃げることなく耐えました。

「カウンセリングを受ける前は例えるなら記憶をいくつもの部屋に閉じ込めていた。幼いころの自分の体験を1つずつ部屋の中から思い出すことで記憶がつながり、回復に向かっていった」と話していました。

“別の人格”は自分自身を守るため

なぜ知らない私が出てくるのか。

ある医師は「今、起きたことは自分の身に起きたことではない、別の人に起きたことだ」と思い込むことで、耐えがたい心身の傷から自分自身を守ろうとするからだと話していました。そして、その時の記憶を封じ込めてしまうこともあるそうです。

オルガさんも「私にとっては耐えがたい暴力にさらされた子ども時代を生き抜くための創造的な対処法だった」と語っていました。

同じような症状を見せる人は身近に

取材すると、私の周りにも、同じような症状を見せる知り合いがいたという人がいました。

「学生時代、友人の女性と一緒にテニスをしていた。ボールがうまく打てなかった時、その女性が突然、男性のような野太い大きな声を出し、『何やっているんだ、てめえ。人様に迷惑かけるんじゃないか』と言った。するとすぐ女性の声に戻り、『すいません、すいません』と1人2役のように謝っていた」

「勉強ができていいねとほめたら、『あれは自分ではない。別の人が自分の中に住んでいる



んだ』と話していた」

「当時、数えてみたら少なくとも7、8人の人格があったように思う」



「解離性同一性障害」

東京の精神科専門病院の院長を勤める飛鳥井望医師は、さまざまな人格が出てくる症状について「解離性同一性障害」と呼ばれるものと説明してくれました。

そしてこうした症状を見せる人は、幼いころからの虐待、不適切な養育などで強いストレスがあったり、トラウマを抱えたりするケースが多いという報告があるということでした。

「治療は基本的には時間をかけたカウンセリングが中心になっていきます。周りが病気だと理解して医師の治療につなげることが大切です」と専門的な治療を受ける大切さを強調していました。

言葉のひとり歩きも

解離性同一性障害は、これまでもドラマやノンフィクション小説などで紹介され、「多重人格障害」などと言われていたこともありましたが、そうした言葉が誤解され、つらい経験の中で自分を守ろうとしてきたということが理解されないことも多いそうです。

また解離性同一性障害については、医師の間でもさまざまな見解があり、“人格が複数あることは本人の思い込みもある”というような指摘もあるそうです。

敬意を持って向き合う

私がこのテーマを取材しようと思ったのは、DV＝ドメスティックバイオレンスの取材がきっかけでした。もっとも親しいはずの人から殴られたり、蹴られたりする暴力を受ける。信じて一緒に歩いていくはずの人から、人をおとしめるような言葉を繰り返し突きつけられる。

そうした人をどう支え社会復帰を支援するのか、取材をしていた時に、「人格が幾重にも現れる人がDVの被害者の中にいる」ということを知ったのです。

ある医師の「解離性同一性障害の症状がある人と接する時、“自分の中に身代わりの人格を立てなければ耐えられないほどつらい体験を生き延びてきた人”として敬意を持って接する」という言葉が忘れられません。

医学的にはさまざまな見解があるかもしれませんが、ただ、虐待や暴行、精神的な追い込みを繰り返し受けている人が確実にいます。そうした人が、周りに自分を守ってくれる盾がない時、別の人格という心の盾を作ることで、なんとか命を守ってきたのではないかと感じることが私にもあるのです。

それを忘れずに虐げられた人が立ち直るための取材を続けたい。そして、記憶さえ封じ込めるほど耐えがたい経験をしてきたオルガさんが、医師のカウンセリングに根気よく向き合うことで自分を取り戻すことができ、今は充実した人生を送っていることも伝え続けたいと思います。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

